

第1章 紀州のあけぼのと古代人



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代 昭和(戦後)・平成時代

熊野三山と参詣道

熊野三山

紀伊半島の南部一帯を^{くまの}熊野といい、和歌山県から^{なら}奈良・^{みえ}三重県にまたがっています。ここは太平洋に面していますが、山が折りかさなっていて奥深いところです。この熊野の奥地から中心部に流れているのが熊野川です。

熊野川に近いところに3つの大きな神社があります。川の上流部にある^{たなべ}田辺市本宮町の熊野本宮大社、^{ほんぐう}川口近くにある新宮市の熊野速玉大社、それに、^{たいしや}那智の滝で知られる^{はやまたいしや}那智勝浦町の熊野那智大社です。

これらの神社は、最初はそれぞれの場所にある自然の木や岩や滝などにやどる神を祭り、信仰していたとみられますが、奈良時代ごろには、神社としてかたちをととのえるようになりました。平安時代の中ごろを過ぎると、この3つの神社がおたがいに結びつき、また、神は仏が姿を変えてあらわれたのだという考え方が出てきて、その影響を受けました。それを^{ごんげん}権現といい、^{さんざん}熊野三山とか^{さんしよ}熊野三所権現とか呼ばれるようになったのです。

熊野は不便なところであるだけに、はじめは僧や^{そう}修験者(山伏)が修行してまわる場所でしたが、奥深いところに祭られた熊野の神社が次第に知られて、広く信仰されるようになり、多くの人々が^{さんけい}熊野へ参詣にくるようになりました。



おおゆのはら 大斎原 (もとの本宮の社があったところ)



熊野速玉大社

熊野参詣道

熊野三山へ参詣するための道には、古くは紀伊国を通る^{きいじ}紀伊路と、^{いせ}伊勢の方から来る伊勢路がありました。しかし実際は、熊野信仰がもっとさかんであった平安時代後期から^{かまくら}鎌倉時代にかけては、京都からの参詣道として、おもに紀伊路が利用されました。

京都から船で^{よどがわ}淀川を下り、^{せつづくに}摂津国(大阪市)の^{くぼつ}窪津というところから歩

きはじめ、和泉国から雄ノ山峠を越えて紀伊国に入ってきます。紀ノ川を渡り、海南の藤代（白）峠や、有田と日高の郡境の鹿ヶ瀬を越え、海に近いあたりを南下して、田辺からは中辺路とよばれる山間部の道に入り、いくつもの山坂を上り下りして、熊野本宮に着きます。

熊野三山をめぐるには、まず熊野本宮大社に参り、本宮から船で熊野川を下って、新宮の熊野速玉大社へ、そこから那智へ歩き、熊野那智大社に参ります。京都への帰りは、本宮から中辺路を通り、もと来た道をもどって行きました。

この紀伊路とそれにつづく中辺路の参詣道には、摂津国（大阪市）から熊野まで、大体2kmぐらいの間隔で、「王子」という小さい神社がまつられていて、それに参拝しながら熊野に向かいました。全部で100近くあり、熊野九十九王子とよばれています。

現在、紀伊路・中辺路のうち、田辺市の滝尻王子から那智までの古道は、とくに古い面影が残っていて、世界遺産になっています。

熊野参詣道には、中辺路のほかに、田辺から海岸線近くを通る大辺路、高野山から熊野本宮に通じる小辺路があり、これらは伊勢路とともに、おもに江戸時代に利用されましたが、この道も世界遺産に登録されています。

熊野参詣路とおもな王子跡



上皇・貴族の熊野参詣

熊野へは、皇族・貴族・武士・農民など、いろいろな身分の人々が参詣に来ていますが、特に大がかりな参詣行事は、熊野御幸といわれる上皇方の熊野参詣です。上皇は、天皇が位を退いてからの呼び名で、さらに出家（僧になること）すると、法皇といえます。



熊野那智大社

* 1 第1編 第3章「昔の道と今の道」78ページ参照。

上皇・法皇の熊野参詣は、宇多法皇の907（延喜7）年が最初ですが、盛んになるのは、院政といって上皇が実際の政治を動かし、勢力をふるった時代で、平安時代の終わりごろです。院政をはじめた白河上皇が12回、鳥羽上皇が23回、後白河法皇が34回に及んでおり、次いで鎌倉時代に入って、後鳥羽上皇が承久の乱で隠岐（島根県）へ移されるまでの間に、28回熊野へ参詣に来ています。この4人の上皇で、約130年間に100回近く熊野御幸を行ったこととなります。これらの上皇がいかに熱心に熊野を信仰したかを示すのもです。

上皇・法皇の熊野参詣は、一行の人数が多いときには数百人にのぼり、一番多かったのは、白河法皇の1118（元永元）年の御幸で、814人と記録されています。京都からは往復約600kmで、1か月近くかかるのですから、一度の御幸でも大変な行事だったのです。

熊野御幸の道中のようすがうかがえるものに、後鳥羽上皇に従って来た歌人の藤原定家による、1201（建仁元）年の日記があります。それによると、寒い時にもかかわらず、身を清めるために川や海で水を浴び、どの王子でも神にささげものを供えています。また、後鳥羽上皇は和歌に熱心で、藤代、切目、滝尻などの王子で和歌会を開き、従者の歌人たちが、上皇の出した題で和歌をよみました。各人が和歌を書いたものを熊野懐紙といい、当時の文化史上の貴重な資料とされています。

さまざまな人の熊野参詣

平安時代後期の代表的な歌人である僧の西行は、何度か熊野へ行き、そのつど和歌をよんでいます。八上王子（上富田町）では、サクラの花の歌を社の垣に書きつけたとして、その光景が『西行物語絵巻』に描かれています。

鎌倉時代の時宗という新しい仏教を始めた一遍は、1274（文永11）年に熊野に参詣し、本宮の社殿にこもって、悟りを開いたといわれ、それから各地をめぐり、多くの人々の心に救いを与えました。熊野三山や道中での様子は、『一遍上人絵伝』という絵巻物で見られます。

上皇や貴族の参詣がさかんころ、女性の参詣もかなりありましたが、鎌倉幕府を開いた源頼朝の妻で、尼將軍といわれた北条政子も、1208（承元2）年に鎌倉を出発して、京都に入り、それから熊野に参詣しています。10年後にもう一度参詣したことがわかっていますが、どちらも詳しいことは知られていません。

金閣寺を建てた足利義満の妻だった北野と2人の娘が、1427（応永34）年に、実意という修験者の案内で、熊野三山に参詣していることが、実意の日記で知ることができます。北野はそれまでに13回熊野に



わかやまの知識



【川の参詣道】

熊野参詣で三山を巡拝するさい、本宮から新宮へは熊野川を船でくだり、帰りもここを船でさかのぼるのがふつうでした。江戸時代に大辺路を廻ってきた人も、新宮から本宮へ行くのに、たいてい船を利用しました。

熊野川の本宮・新宮間は40km近くありますが、すぐれた景観をそなえていることで知られ、いまもそのすがたをとどめています。ただ、この間の航行は、悪天候のときなどはたいへん危険でした。新宮からさかのぼるには、船を引いてのぼらねばならず、苦勞のいるものでした。

「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録された際、熊野川のこの区間が中辺路に続くものとして、「川の参詣道」として登録されました。川の流路が世界遺産になるのは、きわめて珍しいことです。

参詣していますが、そのころ武家の女性の参詣も珍しくなかったのです。

また、各地の有力な武士も熊野へ参詣するようになりました。

江戸時代になると、それが農民や商人などに及びました。岩手県北部の久慈市の商人であった吉田金右衛門は、1708（宝永5）年に、73歳で8回目の熊野参詣をしたと書かれた記念碑が、新宮の熊野速玉大社の境内に建てられています。そのころから、関東・東北方面などの農民が集団で、伊勢と熊野に参り、さらに西国三十三所の寺々を巡りました。



大門坂（那智勝浦町）

熊野三山は、各地の霊場とは違って、早くから女性や身体障害者などを受け入れていました。一遍のはじめた時宗の教えがさらにそれを広めて、障害や病気をもった人々が、健康な人の助けをかりながら、遠方からも熊野に参詣し、熊野本宮大社と関係の深い湯峰温泉で湯治をしました。



わかやまの知識



【神さまの島めぐり】

熊野速玉大社の例大祭は、10月15日と16日に行われます。16日が御船祭です。大社第二殿に祀る熊野夫須美神のお祭りで、大社横の熊野川から、約1.5km上流の御船島まで、神霊が赤い神幸船に乗って島を巡ります。それを先導するのが9隻の早船で、勇壮な競漕が行われます。神さまが祀られた由来を演じているのだそうです。



御船島をまわる早船